

私学ならではの

心の交流

昭和五四年三月発行の生徒会誌『石桜』第七四号に、「先輩講話『僕の高校時代』」と題する記事が掲載されている。卒業して間もない先輩が、二年生のあるクラスを訪れて話した内容の記録である。この年代の岩高生のひとつの具体的な姿を知るうえで興味深い。また、兄が弟に語りかけているような語り口がとてもいい。

ボクは二年前、昭和五二年三月にこの岩手高校を卒業した者で、つまり君たちの先輩ということになるね。今の高三が一年の時の三年生だっ

たから、君たちとは入れ替わりだったわけね。それでみんなは知らないと思うがね。ただこのクラスでは（と教室中を見回し）関口と久保田の二人は知っているよ。関口はボクの中学の後輩でね。岩泉の出身だから、ボクも。また、久保田は岩中の生徒だったから知っているよ。

今日ね、母校に来たら、先生方から「生徒に何か受験の体験談でも話してくれよ」と言われてね、お世話になった先生からそう頼まれると弱いものね。それでこんな教壇へ上がる破目になつてしまったというわけよ。やっぱり人の前で話をする時はあがつてしまいますね。でもボクも将来はこういう所に立って、生徒に教える立場になるんだろうけどね。さつき久保先生から紹介していただいたように、ボクは今岩手大

学の教育学部の数学科に入って勉強しているわけ。中学校の数学の教師になりたいくてね。

エーと、何から話したらいいのかね。やっぱボクの体験を話すのが一番いいのじゃないかな。前の時間に三年生の教室で話してきたことだけだね。

この高校に入る前だけど、ボクの兄貴に言われたね。兄貴もこの生徒でね、あれは春休みだったのかな、その兄貴が岩泉の家に戻ってきた時に、「お前は高校に行つてうんと勉強しなければ単位は取れないぞ。全部赤点になるぞ。お前の実力では無理かもしれないな」と言われたわけよ。ボクも自分の実力を知っていたから、そう言われたときはショックだったね。正直言って中学校の成績もあまり良くなかったからね。

だから高校に入ってから、自分で言うのもなんだけど、すごく、一生懸命勉強しました。そう自分でも精一杯やったという感じだね。

そうしたら、その結果ね、一年生の前期の間テストで、思ったより成績が良かったのね。

それでとても嬉しかったな。そうなるも今度は、他の者に追いつかれたくないという気持ちが出ただね。ボクの上にも一人すごく勉強するヤツがいてね。そいつに追いつけというか、追い抜けというか、そいつを目標にして頑張ったわけだ。そうね、一年から二年の前期いや後期もだけど、そいつを追い抜こうと頑張ったんだけど、絶対に追いつけなかったね。不思議なことに、ボクがいくらやっても、そいつはボクの上にいるんだな。そいつの二倍やろうと思ったんだけど、それは無理な話だった。なにしろそいつも一日八時間から九時間勉強していたというからね。その二倍やったら一日が終ってしまう勘定だが、せめてそいつと同じ位はやらなければと思ったね。そして本格的にボクがやり始めたのは一年の後期からだだったかな、とにかく冬休みに入る前だったと記憶しているけどね。

さつきも言ったけど、ボクは岩泉から出てきて、学校の寮に入ったのね。クラブは、運動部へは入らなかったね。文化部にも籍は置いたんだけど、活動はしなかった。クラブ活動をしていなかったから、時間は充分あったね。ただ、クラブをやっているから勉強する時間がないと

いう者がいるが、それは言い逃れだと思うよ。

これはさつきも三年生の所で強調してきたことだけだし。みんなの中でも、クラブを途中でやめた人は思い当たるでしょう。クラブもやらず勉強もしないというのは良くないよね。そういう者はボクらの時代もいたけど、どうしようもないやつになってしまっからね。

それで、ボクの生活はこうだったね。授業が終わって、寮に帰るのは大体四時頃になるのかな。それから寮の食事が六時だったから、その間二時間ほど勉強時間がとれるわけ。その頃そう計画してやったね。そして七時まで食事や何だかんだで休んだりして、何もしないわけ。何もしないっていうか、テレビを見たりしてね。寮の自分たちの部屋にはテレビがなかったから、ラジオとかカセットテープなどしかなかったから、食堂でテレビのニュースとか何かを見て、そのあと七時から十二時頃までの五時間を勉強時間としてとったわけ。食事前の二時間と合わせて、七時間は勉強した計算になるのかな。一年の後期は六時間ぐらいいだったかもしれない。でもそれぐらいやると、テストの時には割と楽だったようだね。ふだん勉強していれば、テスト前にちよつと復習すればわかるような状態だったね。だからあまり徹夜なんかしたようなことはなかったね。二年の前期から後期にかけての時だったかな、ちよつと今の君たちと同じ頃だったと思うが、後期の中間テストの前に必死になって勉強した

んだけど、そしたら病気になるってしまったね。

一週間ボタンキューと倒れてしまったわけ。それで先生に心配やら迷惑かけてしまったけどね。

その頃は、もう出来るかぎり精一杯勉強したね。自分でもバカみたいにやっただと思っている。あの時は一週間床にいたきりだったね。熱が三十九度から下がらなくて困ったけどね。なぜ、体をこわすほどまで勉強しなければならなかったかと言えば、それはもうボクの場合、意地だったね。とにかく、二年の夏休みが終わってから、今度こそはそいつに勝つてやろうと思つて頑張ったんだけど、人の体には限界があるんだね。

この後、話者である立花正男は、受験勉強への心構え、科目別の勉強の仕方、参考書や問題集の選び方、先生を活用する方法などを具体的に話してきかせ、最後に先輩から質問を受けている。この質疑応答も微笑ましい。

——数学のチャート(注:参考書の書名)は赤を使われたんですか?

チャートはⅠⅡまで赤だったね。Ⅲは青だったけど。チャートのⅠはポロポロになるまでやったね。Ⅱはやはり二年になってから買ってやったね。

——各教科とも予習は、毎日やられたのですか?

予習はしました。特に嫌いな教科は一応やっていたね。古典などは嫌いだっただけど、授業で訳があてられるからそれが恐くてガイド

を持って予習したね。現国は漢字練習をしていったのかな。数学はほとんど毎日欠かさずに例題なんかをやっていたね。

——そこまで予習されたら、授業のときに退屈しませんでしたか？

退屈はしなかったね。数学などは自分で違う問題をやったりして、先生に怒られたこともあったけどね。何か勉強しなければ落ち着かないという感じがあったのね。君たちにはそんなことはないかな。予習していかないと不安だという気持ちがある……。

——先輩は高校時代に、勉強以外で何か楽しみがありましたでしょうか？

ボクの場合、楽しみといえば卓球をやったことを覚えているね。放課後に武田先生とやっつね、いま十二連敗進行中だけどね。寮にも卓球台があって、よくやったものだね。あと何かあったか、あんまりないね。だけどその代償として今楽

しんでいるからね。大学という所は楽しいよ。

——先輩は寮でラジオを聴きながら勉強するということもありましたか？

そう言われればあったね。ながら勉強という言葉だね。ボクは特に野球が好きで、巨人ファンだけど、あの頃最下位になった年があるでしょ。それでカッカしながらやっつたね。

——そういう時、勉強に集中できたでしょうか？

やっぱり集中できっこないね。数学なんかはまだ良かったけど、不得意科目になるとラジオに集中してしまっただめだね。だからあの方では、ながら勉強はやめることにしたけどね。

——先輩が高校生活三年間で得たものは、端的に言えば何だったのでしょうか？

むずかしい質問だね。そうね、まず何といっても希望する大学に入れたことだろうね。それも一生懸命勉強して、自分で自分の道を開いていったという意味だね。努力すれば必ずその報

いがあるんだということを身をもって知ることができたということかな。それからもう一つ、よく職員室に行つて、知っている人（先生だけ）から何でも教わるという精神を学んだことかな。聞くのはい時の恥だけど、慣れてくれば何ともないのね。とにかく大学生になった今でも岩高に時々顔を出して先生方と親しく話せるのは有難いことよね。校舎も立派になったし、君たちも大いに頑張つてほしいと思う。

昭和五〇年代には、不定期ながらこのような講話会が催されている。石桜祭などで行なわれる歳の離れた大先輩の講演とはまた違った意味で、在校生には大きな励みとなったに違いない。先輩と後輩が兄弟のように交流できる家族的な雰囲気は、私学ならではのものではないだろうか。あるいは、県内に数ある私立高校のなかでも、本校だけのものかもしれない。